

# 第一貨物

## 底力に限りなし

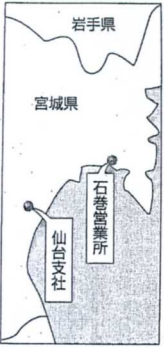
### 極限状態で一致団結

リーマン・ショックを克服し、「反転攻勢」で上昇基調へ転じようとした矢先、東日本大震災が第一貨物会社・山形市、武藤幸規社長を襲った。石巻、気仙沼の両営業所が全壊。車両四十五台、グループ全体で四人の従業員が命が失われた。一方で、翌日直ちに営業を再開。十日後にはほぼ正常化させた。力の源を探った。(矢田 健一郎)

すごい地震だった。千ノも電気も通信も途絶えた。雪が降り出し寒かった。従業員二十六人と連絡が取れず、翌日になるまで仙台東部有料道路の向こう側が津波に襲われていたことも分からなかった。

「最優先したのは安全確認。最後の一人の消息がつかめたのは八日後の十九日になってから」と菅野泰治仙台支社長は当時を振り返る。

本社と顧客との連絡が途絶えた。電話がかかってくることも呼び出し音が鳴らない。携帯もだめ。孤立する中、あらためて問われたのは企業の強さだった。「指揮の大



切さを実感した(菅野支社長)。指を差せば、全員が一つになって動く。団結力がそこにはあった。



「震災を乗り越え、この先も攻めの姿勢は変えない」と菅野仙台支社長(右)、庄司山台東支社長

日が暮れ切りは暗くなる。投光器を取りに行った車は渋滞で動けない。乗用車五台をホー台に上げ、ライトで照らす。荷物は全て運行車に詰め、門を閉め見張りを立てた。

震災翌日から業務を再開へ

荷物と従業員をどう守るか、どう荷物を届けるか。周囲の施設では盗難も発生。照明もなく道路状況も不明。運行便の出発を翌朝まで我慢した。

震災翌日から始動。限られた燃料。依然顧客との連絡はつかない。それでも十五日の段階で集配車を出した。「燃料のことはなくなった時に考えよう。とにかく第一貨物が動いていることを、顧客に伝えたかった(同)。

怒る客もいたが手を握って喜ぶ客もいた。そんな時自分たちの行動に間違いはなかったと感じた。武藤社長の「油一滴残るまで運ぶ」との方針と現場の思いが全く変わらないうちに励まされた。

困の施設では盗難も発生。照明もなく道路状況も不明。運行便の出発を翌朝まで我慢した。

「山形の本社から水やおにぎり、物資が届いた。家族にも供給でき、心底ありがたかった」と庄司周司仙台東支社長。連絡や交通手段がない中、店所の隣にある独身寮の従業員の存在にも助けられた。

一週間はほど仙台市内中心部から電気が復旧。「明かり

の懐かしさにホッとした(菅野支社長)。

行政からの応援要請にも必死で応えた。東京都の石原慎太郎知事から感謝状も贈られた。体制を立て直し、さあこれからという四月十七日、再び大地震が。くじけそうになる心を必死で支えた。

痛み乗り越えエリアを再建

東北エリア再建は無傷ではいかなかった。気仙沼を二関に、大船渡を釜石に、それぞれ営業所を統合。「家を失い、その上仕事もやめようというのか。当時五十八歳のドライパーは言った。「第一貨物にはあんな力が必要だ。すぐにおとさん(社長)に話をしなさい。菅野支社長はそう答えたという。

「震災を言い訳にしたくない」

石巻、気仙沼、大船渡、釜石の三陸四営業所だけを見ると、二月初めで約四〇%の仕事が減少。反対に震災後「顧客第一」で取り組んだ結果、実を結んだ仕事もある。復興が本格化すれば雑貨も動く。「震災を言い訳にはしたくない」と菅野支社長。「この先も攻めの姿勢は変えない。顧客ニーズに柔軟に対応し、品質はいま以上に高めていく」